

『就実論叢』第44号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2015年2月28日 発行

# 特別支援学校「キャリア教育」実践に関する 教員の意識調査（Ⅰ）

**Survey on Teachers' Consciousness in Providing "Career Education"  
at Special Needs School (I)**

石 山 貴 章 ・ 矢野川 祥 典  
宇 川 浩 之 ・ 田 中 誠  
岡 田 信 吾 ・ 下 山 真 衣

# 特別支援学校「キャリア教育」実践に関する 教員の意識調査（Ⅰ）

Survey on Teachers' Consciousness in Providing "Career Education"  
at Special Needs School (I)

石山 貴章 (就実大学教育学部教育心理学科)  
矢野川 祥典 (高知大学教育学部附属特別支援学校)  
宇川 浩之 (高知大学教育学部附属特別支援学校)  
田中 誠 (就実短期大学幼児教育学科)  
岡田 信吾 (就実大学教育学部教育心理学科)  
下山 真衣 (就実大学教育学部教育心理学科)

特別支援学校における「キャリア教育」実践を継続的に検討していくための事前調査として、59名の教員に対し、自分の実践に関する意識調査を行った。分析の結果、教員の意識は、キャリア支援に関する16の質問項目中、4項目で有意差が確認された。今回の調査によって、「キャリア教育」を展開していくために必要とされる基礎データが提示できたとともに、定期的なフィールドワーク調査を通じて、学校現場では、教員の意識変革が図られながら、より、質の高い「キャリア教育」実践のあり方が追究されていることが確認された。

キーワード 特別支援学校 キャリア教育実践 意識調査 分散分析 多重比較

The present survey basic data required for developing career education. Teachers' (N=59) consciousness about this issue was investigated in a preliminary survey on providing "career education" at special needs school. The results indicated significant differences in the degree of teachers' satisfaction with career support related to 4 of 16 items of career support, depending on the department. Regular fieldwork has confirmed that higher quality career education is being attempted at schools, through reforming the consciousness of teachers.

Key Words Special needs school Career education practice  
Teachers' Consciousness Analysis of variance (ANOVA) Multiple comparison

## 1. 問題と目的

キャリア教育の理論的枠組みとして、2002年に、国立教育政策研究所生徒指導研究センターが通常学校の児童生徒を対象として示した「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」が挙げられる。この中では、1) キャリア発達の視点からどのような能力や態度の育成を目指したものなのか、2) 教育実践全体としてのバランス、3) 能力や態度の育成に関する活動のあり方等について言及されている。

2010年には、国立特別支援教育総合研究所が、勤労観や職業観の育成を図る観点から、Functional Curriculum (Wehman&Kregel, 2004) のキャリア発達段階や本人中心の支援計画(Person-Centered Planning) の概念を取り入れながら、知的障害のある児童生徒の「キャリア発達段階・内容表(試案)」を作成した。この本人中心の支援計画は、「個別化」「機能的」「適応的」「支援の方向性」を主要原則として成り立っている。

ここでは、各学部(小・中・高)段階で育てたい力(観点)について、「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の4つの能力領域を取り上げ、小学部で13観点、中学部で17観点、高等部で18観点が示された。これは、個々の児童生徒の生活と発達段階を視野に入れた系統的な観点化を図ったものである。

上岡(2013)は、「特別支援教育の本来のねらい、目指す方向性を理解すれば、キャリア教育を抜きにしては特別支援教育が成り立たない。キャリア教育を理解すればするほど、特別支援教育を充実、発展させるためには欠かすことのできない重要な教育であるということが認識できる」と言及しており、特殊教育の時代から培われてきた「教育の原点」を改めて問い直し、最終的な目標は、子どもたちの「人生の質」(Quality of Life)を高めるための取組であることを改めて問い直す機会であると捉えている。

渡辺(2013)は、キャリア教育の理念と特別支援教育における今後の展望について、「キャリア教育への取組が日本の教育全般の改革の水先案内的役割を果たすという展望をもっている」とした上で、「現状の実践に満足することなく、キャリア教育を通して、指導者自身の態度や能力を振り返り、組織的な意識の改革が必要である」と言及している。これは、キャリア教育自体が、現場の意識改革、変容をもねらって打ちだされていることをも意味するものと考えられる。「キャリア教育」をどのように捉えて、実践現場に還元していくかについては、学校組織全体の課題として共通化が図られなくてはならない。

現在、多くの特別支援学校がこの「キャリア教育」を受け止めて、これまでの実践や理論を再検証、再構築しようとしている。しかしながら、まだ、現場では、「これまでの実践と何が異なっているのか」「あらためてキャリア教育を検討していく意味は何なのか」「特別支援学校では、従来から、今でいうキャリア教育実践の積み重ねがなされているのではないかな」等、さまざまな意見や疑問がなげかけられている。

特別支援学校では、従前から、子どもたちの将来像を見据えた地道な実践が展開されており、職業観や職業意識、態度等を育てていくための実践スキルが培われている。よって、今

回のキャリア教育の推進によって、改めて、現場の実践の検証を行い、さらに、質の高い実践を見出ししていくための機会として捉え直していく意識が必要とされている。これまでの実践を丁寧に振り返り、検証、発展させていくためにも、自分たちの実践を見直していくことが重要視されなくてはならない。

先行研究においても、各特別支援学校の取組や実践紹介、分析が試みられており、そこから、学校の独自性やキャリア教育に有効とされる知見が見出されつつある。現場の先生方から、キャリア教育の意義や重要性は理解できるものの、日々の実践にどのように活かしていけばよいのかに苦慮しているという意見を多く聞く。

ここには、二つの問題点があり、キャリア理論とキャリア実践の間に、まだ、大きな溝が存在しているため、キャリア教育を意識した実践のあり方とこれまでの実践を、どのようなキャリア観点でもって評価し、実践を再構築していけばよいのかという問題が潜んでいるように思われる。この問題を解決していくためには、各特別支援学校のキャリア教育に関する実践を明らかにしていくとともに、その実践がもつ意義や課題を分析し、再評価していくことが必要だと考える。

よって本研究では、特別支援学校における教育実践について、キャリア発達の視点から、その取組を具体的に分析し、各学校の「キャリア教育」の実践をまとめあげていく。そのためにも、まずは、「キャリア教育」実践と現場教員自身の取組との意識の整合性を検証し、今後の「キャリア教育」の実践に向けた指導・支援の観点を検討する必要があると考え、継続研究の第1報として、特別支援学校における「キャリア教育」の教員の実践満足度に関する意識調査を実施することとした。

## Ⅱ. 方法

### 1. キャリア観点について

A支援学校においては、昨年度より、「キャリア教育」をメインとした研究実践活動が行われている。例えば、学部（寄宿舎を含む）ごとに4能力領域の割合（ここでは、主たる観点を2点、関連する観点を1点として検討）をみると、それぞれの学部の発達段階や生活年齢に相応したものとなっている。例として、多くの特別支援学校が用いている単元における観点位置付けシートの内容を示しておく。

Table.1 単元における観点位置付けシートの内容

人間関係形成能力	人とのかかわり / 自己理解・他者理解
	集団参加 / 協力・共同
	意思表示
	挨拶・清潔・身だしなみ / 場に応じた言動
情報活用能力	様々な情報への関心 / 情報収集と活用
	社会資源の活用とマナー / 法や制度の理解
	金銭の扱い / 金銭の使い方と管理 / 消費生活の理解
	働く喜び / 働くことの意義
将来設計能力	習慣形成
	夢や希望
	やりがい / 生きがい
	進路計画
意思決定能力	目標設定
	自己選択 / 自己選択 (決定・責任)
	振り返り / 肯定的な自己評価
	自己調整

独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 (2010) を参考に作成

## 2. 対象

A支援学校(知的障害)に勤務している教員59名(小学部20名、中学部17名、高等部22名)の計59名に対して、「キャリア教育」に関する自身の実践満足度に関する意識を明らかにしていくことを目的として、調査質問紙調査の協力を依頼した。回収率は100%(調査実施日:2014.8.24)。

### 1) 調査協力者の属性

Table.2 調査協力者

学 部	人 数	性 別	
		男性	女性
小学部	20	2	18
中学部	17	7	10
高等部	22	11	11
計	59	20	39

Table.3 勤務年数(講師期間含む)

勤務年数	小学部	中学部	高等部
1-5年	3	4	7
6-10年	3	4	1
11-20年	2	0	4
21-30年	4	4	8
31年~	8	5	2
計	20	17	22

## 2) 手続きと内容

調査の手続きは、A支援学校研修会「キャリア教育の視点を踏まえた授業実践」(講師：石山)で「キャリア教育実践満足度」に関する調査票を配布、回収する集合調査を実施した。調査項目は、Ⅰ. 調査基礎項目、Ⅱ. 独立行政法人：国立特別支援教育総合研究所が2010年に示した「単元における観点位置付けシート」の内容16項目及び総合評価、自由記述項目を用いた。評価は、「大変不満足」(評定1)から「大変満足」(評定5)までの5件法による評価を行った。

## 3) 分析方法

Ⅰの調査基礎項目(基礎データ質問項目)では、(1)所属学部、(2)性別、(3)勤務年数(講師期間含む)について、 $\chi^2$ 検定及び残差分析を行った。Ⅱの実践評価項目は、自身のこれまでの実践について、キャリア観点16項目を用いながら、各項目における指導・支援の満足度について回答をしてもらい、得られたデータを、一要因分散分析及び多重比較を用いて分析を行った(IBM SPSS Statistics 19.0)。回答については、小学部、中学部、高等部にそれぞれ所属している教員(非常勤講師等含む)の3群間において、それぞれの項目ごとに評定平均値を算出し、その後、一要因分散分析を実施している。ここで、有意差が確認された項目については、引き続き、Tukey法による多重比較(5%水準)を行っている。等分散性が仮定されない場合にはWelchの検定を行った。

## Ⅲ. 結果と考察

### (1) 「キャリア教育」実践に関する教員の意識調査結果

回答者の基本属性については、小学部20名(33.9%)、中学部17名(28.8%)、高等部22名(37.3%)であった。また、学部間における勤務年数の状況は、小学部で1-5年が3名(15%)、6-10年が3名(15%)、11-20年が2名(10.0%)、21-30年が4名(20.0%)、31年以上が8名(40.0%)であった。中学部は、1-5年が4名(23.5%)、6-10年が4名(23.5%)、11-20年が0名(0.00%)、21-30年が4名(23.5%)、31年以上が5名(29.4%)となっていた。高等部は、1-5年が7名(31.8%)、6-10年が1名(4.5%)、11-20年が4名(18.2%)、21-30年が8名(36.4%)、31年以上が2名(9.0%)であった。 $\chi^2$ 検定の結果、5%水準で有意差が確認された( $\chi^2(2)=2.83, p<.05$ )。残差分析の結果、小学部は勤務年数31年以上が多く、1-5年の新任教員は少ない。中学部は、1-5年及び6-10年の新任教員が多く、高等部は、11-20年及び21-30年の中堅教員の割合が高かった( $p<.05$ )。各学部の教員男女差についても、5%水準で有意差が確認されている( $\chi^2(2)=8.05, p<.05$ )。残差分析の結果、男性教員数は高>中>小、女性教員数は小>中・高となっている。

一方、分散分析結果では、16項目中、5「様々な情報への関心／情報収集と活用」、6「社会資源の活用とマナー／法や制度理解」、12「進路計画」、13「自己選択／自己決定・責任」

の4項目について学部間の有意差（群間差）が確認された。Table.5に、多重比較結果と共に示している。「単元における観点位置付けシート」の4つのカテゴリーにしたがって結果を図示しておく（数値は満足度平均値）。

Table.4「キャリア教育」実践に関する教員の意識調査（満足度）

実践評価項目	総合平均値 (SD)	小学部 (SD)	中学部 (SD)	高等部 (SD)	分散 分析	多重 比較
1. 人との関わり／自己理解 ／他者理解	3.03(0.72)	3.00(0.56)	3.12(0.86)	3.00(0.76)	<i>n.s.</i>	
2. 集団参加／協力・共同	2.92(0.66)	2.90(0.55)	2.82(0.81)	3.00(0.62)	<i>n.s.</i>	
3. 意思表示	2.83(0.67)	2.75(0.55)	2.88(0.78)	2.86(0.71)	<i>n.s.</i>	
4. 挨拶清潔身だし／場に応じた言動	3.00(0.72)	2.95(0.58)	3.00(0.61)	3.05(0.90)	<i>n.s.</i>	
5. 様々な情報への関心／情報収集	2.36(0.69)	2.10(0.64)	2.65(0.79)	2.36(0.88)	$p<.05$	中>小* ( $F=3.11$ )
6. 社会資源の活用とマナー／法制	2.41(0.75)	2.10(0.31)	3.00(0.83)	2.18(0.66)	$p<.01$	中>小** ( $F=13.00$ )
7. 金銭の扱い／金銭管理／消費生活	2.53(0.65)	2.40(0.60)	2.47(0.62)	2.68(0.72)	<i>n.s.</i>	
8. 働く喜び／働くことの意義	2.71(0.59)	2.60(0.50)	2.76(0.66)	2.77(0.61)	<i>n.s.</i>	
9. 習慣形成	2.76(0.70)	2.80(0.70)	2.88(0.60)	2.64(0.79)	<i>n.s.</i>	
10. 夢や希望	2.47(0.68)	2.45(0.76)	2.59(0.71)	2.41(0.59)	<i>n.s.</i>	
11. 生きがい／やりがい	2.56(0.70)	2.80(0.70)	2.53(0.87)	2.36(0.49)	<i>n.s.</i>	
12. 進路計画	2.20(0.89)	1.50(0.61)	2.65(0.86)	2.50(0.86)	$p<.01$	中・高>小** ( $F=13.97$ )
13. 目標設定	2.78(0.67)	2.85(0.49)	2.76(0.90)	2.73(0.63)	<i>n.s.</i>	
14. 自己選択／自己決定・責任	2.69(0.62)	1.85(0.75)	2.82(0.64)	2.64(0.66)	$p<.01$ $p<.05$	中>小** 高>小* ( $F=11.04$ )
15. 振り返り／肯定的な自己評価	2.61(0.70)	2.70(0.73)	2.65(0.70)	2.50(0.67)	<i>n.s.</i>	
16. 自己調整	2.66(0.65)	2.65(0.49)	2.76(0.75)	2.59(0.80)	<i>n.s.</i>	
17. 総合評価	2.66(0.69)	2.60(0.60)	2.65(0.79)	2.55(0.60)	<i>n.s.</i>	

(5段階評価 大変不満足1点 不満足2点 やや満足3点 満足4点 大変満足5点)

\*有意差については*n.s.* (有意差なし)、\* $p<.05$ . \*\* $p<.01$ .を示す。

\*等分散性が仮定されない場合は Welch 検定を実施した。

\*小 (小学部)、中 (中学部)、高 (高等部) と表記している。

## (2) キャリア観点における「4能力領域」について

### 1. 「人間関係形成能力」

質問項目1-4の枠組みである「人間関係形成能力」領域では、各学部間に有意差はみられなかった。1「人との関わり／自己理解／他者理解」では中学部、2「集団参加／共同」

では高等部、3「意思表示」では中学部、4「挨拶／清潔／身だしなみ」では高等部の満足度平均値がやや高かった。小学部で「挨拶／清潔／身だしなみ」の平均値が低いのは、この段階では、日常生活の力を育てていくことに比重が高く、それにより、小学部教員の意識も高いため、自己評価が厳しくなっていることが想定される。同様のことが、中学部の「集団参加／共同」や高等部の「人との関わり」「意思表示」などにも想定される。

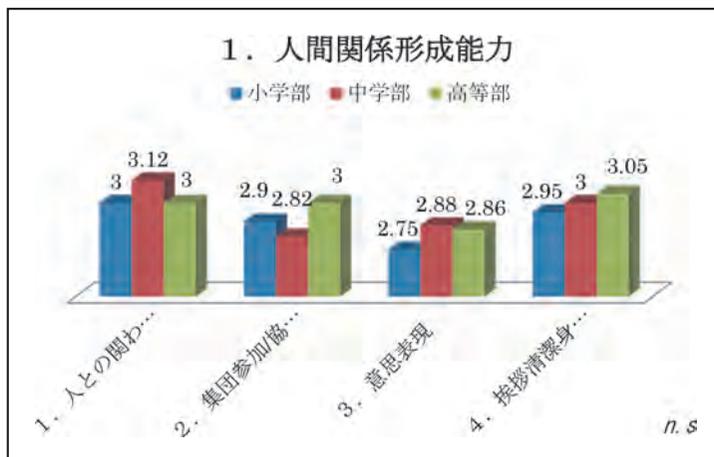


Fig.1 人間関係形成能力 (学部間 満足度平均値比較図)

## 2. 「情報活用能力」

質問項目5-8の枠組みである「情報活用能力」領域では、5「様々な情報への関心／情報収集と活用」で中学部と小学部間 ( $F(2.56)=3.11, p<.05$ )、及び、6「社会資源の活用とマナー／法や制度理解」で中学部と小学部・高等部間 ( $F(2.56)=13.00, p<.01$ ) で有意差が確認された。7「金銭の扱い／金銭の使い方と管理／消費生活の理解」及び8「働くよろ

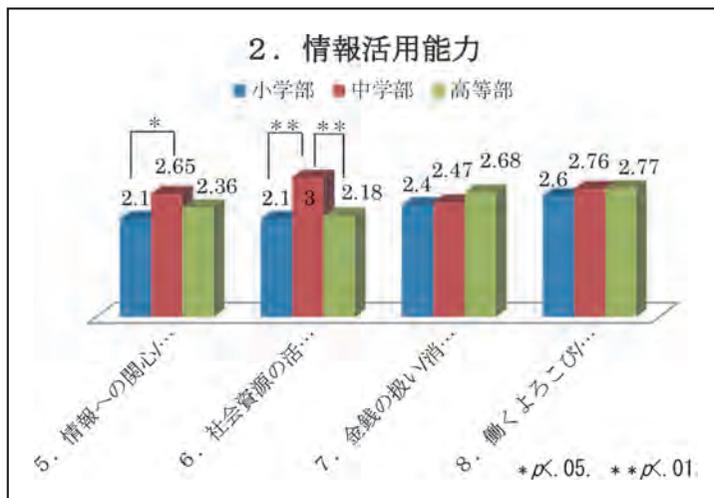


Fig.2 情報活用能力 (学部間 満足度平均値比較図)

こび／働くことの意義」では高等部がやや満足度平均値が高かった。6「社会資源の活用とマナー／法や制度理解」で中学部と小学部、高等部間で顕著な有意差が確認されたのは、A支援学校では、中学部段階で、情報処理関連の実践を継続的に行っていることが影響を及ぼしていることが確認されている。高等部段階前に、基本的な情報処理力の形成を身に付けさせ、さらに、定着化、発展化させようとする取組（パソコン、インターネット、携帯、校外学習）等が多く実践されている。

### 3. 「将来設計能力」

質問項目9-12の枠組みである「将来設計能力」領域では、12「進路計画」で小学部と中学部・高等部間 ( $F(2.56)=13.97, p<.01$ ) で有意差が確認された。9「習慣形成」及び10「夢や希望」は中学部、11「生きがい／やりがい」は小学部の満足度平均値が、わずかではあるが高かった。12「進路計画」の顕著な有意差は、小学部での満足度数値の低さが影響を及ぼしている。

当然のことながら、小学部段階では、まだ明確な進路計画は検討されるには至っておらず、むしろ、将来の夢や希望等に比重を置いた指導・支援がなされていることが想定されよう。しかし、ここでの将来の夢や希望が、中学部、高等部へと移行するにしたがって、より現実的な動向へと向かうサポートに繋がっていくことは重要視されなくてはならない。他の項目については、3学部間で同様の満足率が得られており、特に、「将来設計能力」に不可欠な「習慣形成」については、小学部から高等部までの一貫した支援がなされていることが考えられる。

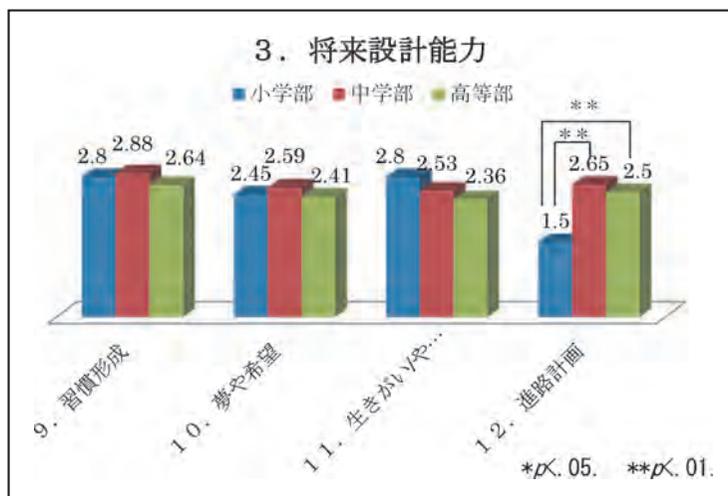


Fig.3 将来設計能力 (学部間満足度平均値比較図)

### 4. 「意思決定能力」

質問項目13-16の枠組みである「意思決定能力」領域では、14「自己選択／自己決定・自

己責任」で中学部・高等部と小学部間 ( $F(2.56)=11.04, p<.01$ ) で有意差が確認された。13「目標設定」及び14「振り返り／肯定的な自己評価」は小学部、16「自己調整」は中学部の満足度平均値がやや高かった。14「自己選択能力」については、小学部段階では、まだ、自分で判断し、選択させていくよりも、まずは、基本的な生活指導やパターン、活動等を養っていくことに比重がおかれるため、中学部、高等部と比較して、日々の授業の中で取組んでいる意識の差が現れているものと考えられる。他の項目については、学部間でほとんど差が見られてはおらず、児童生徒の「意思決定能力」については、どの学部においても、高い意識をもって教員が実践していることが想定された。

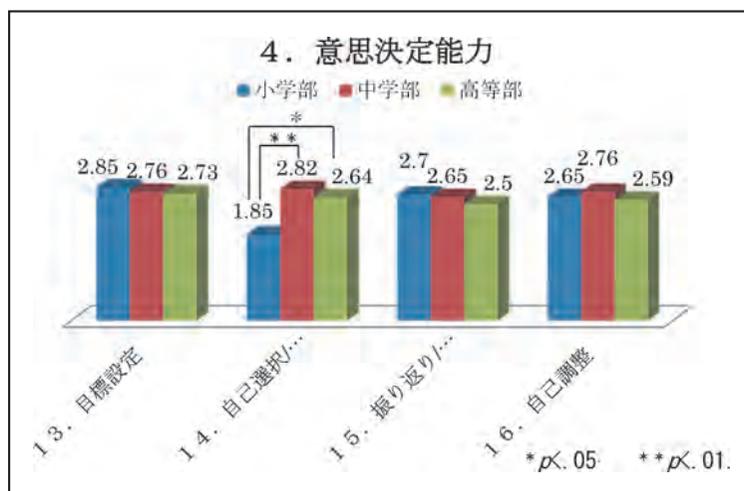


Fig.4 意思決定能力 (学部間満足度平均値比較図)

#### 5. 「総合評価」(総合満足度)

各学部間の「キャリア教育」実践の満足度に関する総合評価については、学部間での有意差はみられなかった。満足度が一番高かった学部は中学部であり、次いで、小学部、高等部という結果となっている。総体的に、「キャリア教育」実践において、教員がどれだけ満足

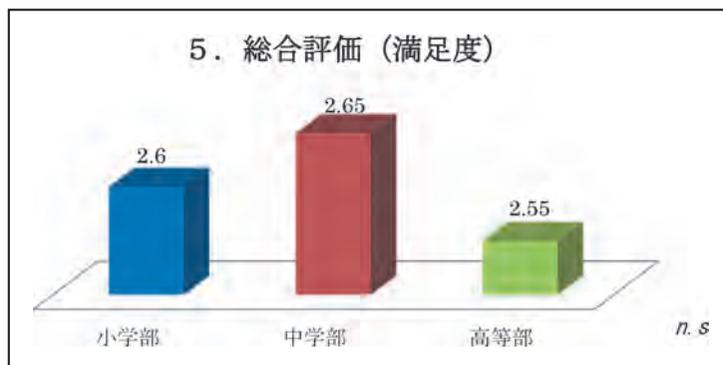


Fig.5 総合評価 (満足度) (学部間満足度平均値比較図)

のいく取組を行っているかについての意識については、高等部が教員自身の「キャリア教育」実践に対して、不満足な自己評価を行っており、これは、目前に迫っている卒業後の進路支援に関する意識が高い分、より厳しい評価がなされていることが想定される。

#### Ⅳ. 今後の展望と課題

A支援学校の意識調査から得られた結果を基に、今後、学校全体としてのキャリア教育観に関して確認がされた共通理解項を示すと、1) 子どもと教師の願いの摺り合わせ、2) 活動の再構成化(振り返り)、3) 役割の充実・発展に比重、4) 授業づくりから“子ども理解”へ、5) 学ぶ・労働・生活の系統性、6) 育てたい力の明確化、7) キャリア教育枠の拡張、8) 様々な価値観を活用、9) 教師自身の問題意識としての捉えの9項目が確認された。

これらの観点を意識化しながら、日々の教員の取組を明確にし、その実践知をキャリア教育につなげていくことの共通理解・共通認識が図らなくてはならない。その中でも、特に、発達の側面(内的側面を含む)や生活力の般化、子ども・保護者・先生の思い、授業・生活実践(積み上げの再考・確認)、福祉現場・企業・各関係機関などの考え方、学校現場の経験知(自身の実践をまとめる作業)や実践知の擦り合わせ作業の必要性も示唆された。

一方、今回の意識調査結果を受けて、今後、支援学校の「キャリア教育」実践を展開していくにあたっての重要視すべき観点について、以下の9点が明らかにされている。

- 1) 各学部における「キャリア教育」観点の明確化
- 2) 個々の児童・生徒の実態を的確に把握する姿勢
- 3) 教員同士の話し合いや研修結果を授業に繋げる
- 4) 具体的な事例研究・実践研究の積み上げ
- 5) 授業で使う教材の「価値化」の明確化
- 6) 日々の実践の「みえる化」を追究
- 7) 卒業後の姿を意識した授業内容の選定・設定
- 8) 教員の意識の“ずれ”から授業を発展させる
- 9) 教育実践・活動の省察を重要視する

今後、「キャリア教育」実践を現場理論へとつなぐためには、それぞれの授業実践で見られる、交絡(潜伏)変数を浮上させ、課題と変容を明確化していきながら、これらの影響も含めて授業を検討することが確認された。また、実践においては、さまざまな要因や影響を認識し、児童生徒の活動について、「キャリア教育」を意識化しながら、翻訳、解釈していくことが確認された。

今回は、A支援学校に焦点をあてて、学校教員の「キャリア教育」に関する意識を明らか

にしていくとともに、今後の授業実践のあり方や方向性に向けた検討資料を提供した。引き続き、支援学校の実践に関与しながら、教員の高い意識を日々の授業実践につなげていくことができるような手立てやアプローチを明らかにしていきたいと考えている。そして、実践現場でしか味わうことのできない子どもたちとの相互作用の重要性を浮上させながら、実践研究、事例研究の意義についても確認していきたいと考える。

今後も、特別支援学校のフィールドワークや共同実践研究活動等を通して、現場の実践を可視化していくとともに、「キャリア教育」の観点から、おのおのの授業実践に埋もれている重要な要素を掘り起こしていきたいと考える。

### 謝辞

今回、定期的に学校フィールドワーク調査や研究活動及び研修会等に参加させていただいたA支援学校教職員の方々をはじめ、さまざまな実践知を教えてくれた児童生徒のみなさんのご協力に心より感謝申し上げます。

### 【文献】

- 中央教育審議会（2011）：今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）。
- 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所〔編著〕（2010）：「知的障害教育におけるキャリア教育の在り方に関する研究－“キャリア発達段階・内容表（試案）”に基づく実践モデルの構築を目指して－（平成20・21年度），課題別研究報告書。
- 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所〔編著〕（2011）：「特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック－キャリア教育の視点による教育課程及び授業の改善、個別の教育支援計画に基づく支援の充実のために－」，ジヤース教育新社。
- D.E.Brolin&N.C.Gysbers（1989）：Career Education for Students With Disabilities, *Journal of Counseling&Development*,68,155-159.
- 愛媛大学教育学部附属特別支援学校（2011）：「将来の“働く生活”を実現する教育－キャリア教育に基づく支援内容・方法の検討－」，明治図書。
- 藤井明日香・川合紀宗・落合俊郎（2012）：特別支援学校（知的障害）高等部の進路指導担当教員に求められる専門性－職業リハビリテーションとの関係から－，*職業リハビリテーション*，25(2)，2-13.
- 広島県立教育センター（2009）：知的障害特別支援学校におけるキャリア教育充実に向けたカリキュラムの研究－職業的自立に必要な力に関する意識調査とキャリア発達の分析を通して－」，*研究紀要*，第36号，21-40.
- 経済産業省〔編〕（2009）：「学校と企業・地域をつなぐキャリア教育コーディネーター キャリア教育ガイドブック」，学事出版。

- 菊池一文 (2013) : 特別支援学校におけるキャリア教育の推進状況と課題 - 特別支援学校を対象とした悉皆調査の結果から -, 発達障害研究, 35(4), 269-278.
- 菊池一文 [編著] (2012) : 「特別支援教育充実のためのキャリア教育ケースブック - 事例から学ぶキャリア教育の考え方 -, ミネルヴァ書房.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2002) : 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について (調査報告書).
- 文部科学省 (2011) : キャリア教育における外部人材活用等に関する調査研究協力者会議報告書「学校が社会と協働して一日も早くすべての児童生徒に充実したキャリア教育を行うために」.
- 大岡孝之・菅野敦 (2012) : 知的障害者の作業能力と社会生活能力との関連, 発達障害研究, 34(3), 290-295.
- 尾崎祐三・松矢勝宏 [編著] (2013) : 「キャリア教育の充実と障害者雇用のこれから - 特別支援学校における新たな進路指導 -, ジアース教育新社.
- Sterner,W.R. (2012) : Integrating Existentialism and Super's Life-Span,Life-Space Approach,The Career Development Quarterly,60,152-162.
- Super,DE. (1980) : A life-span, life-space approach to career development,Journal of Vocational Behavior,16(3), 282-298.
- 上岡一世 (2013) : 「キャリア教育を取り入れた特別支援教育の授業づくり」, 明治図書.
- 渡辺明広 (2012) : キャリア発達の視点からみた、特別支援学校 (軽度知的障害) 高等部の作業学習におけるものづくり (製作・生産) と [流通・サービス] (商品管理、販売、事務) の学習内容の分析 - 学習内容と職業的 (進路) 発達にかかわる諸能力や「育てたい力 (観点)」の関連づけをとおして -, 発達障害研究, 34(2), 207-219.
- 渡辺三枝子 (2013) : キャリア教育の理念と特別支援教育における今後の展望, 発達障害研究, 第35号, 第4号, 279-286.
- Wehman,P.& Kregel,J. (2004) : 「Functional Curriculum for Elementary,Middle,and Secondary Age Students with Special Needs.2nd Ed.PRO-ED,Austin,TX.